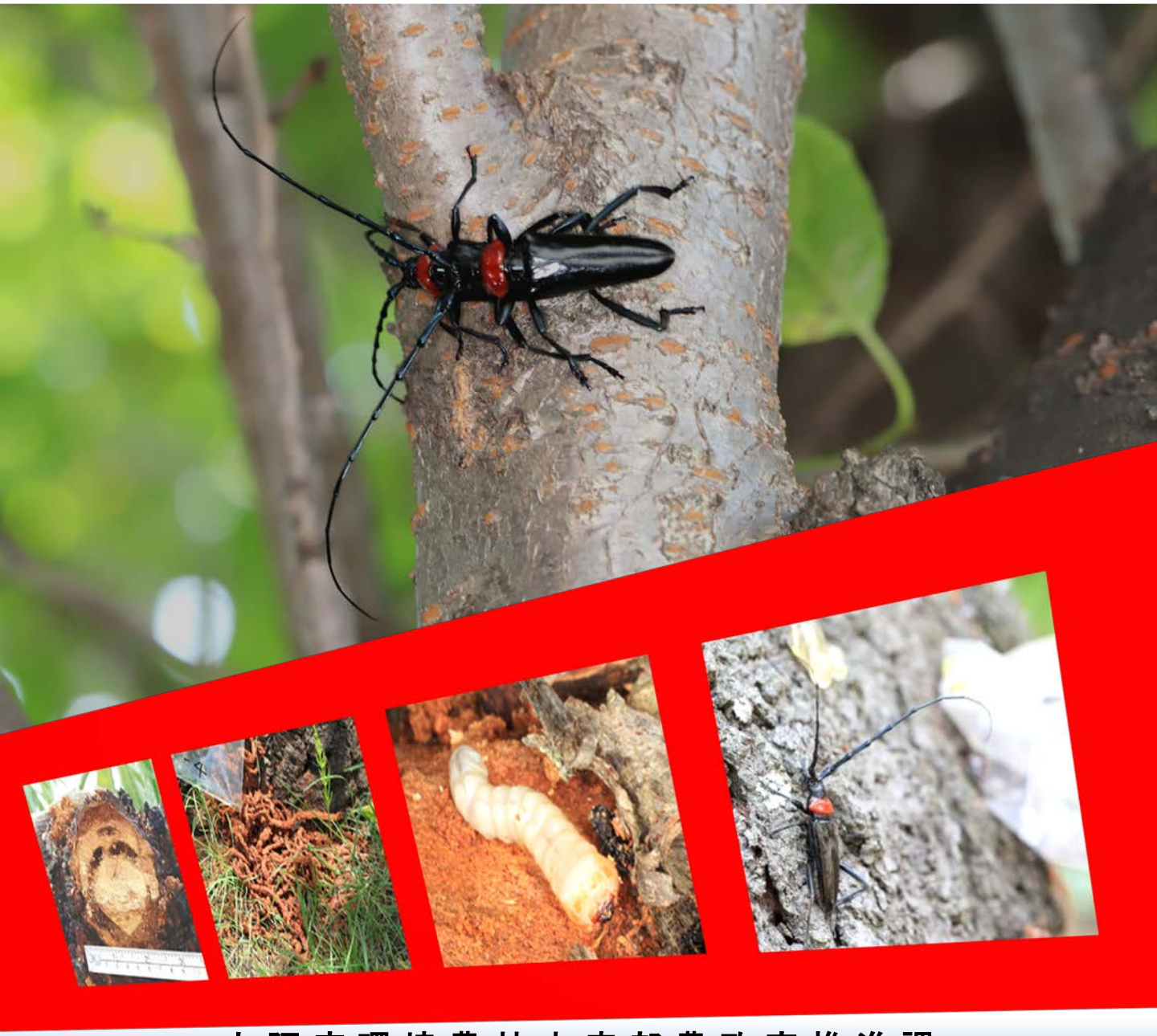
大阪府

令和2年度農業技術資料

もも、うめ、すももなど、バラ科果樹の新たな脅威！

クビアカツヤカミキリの生態と防除対策

改訂版 R3.3



大阪府環境農林水産部農政室推進課
病害虫防除グループ

1．はじめに

侵入害虫クビアカツヤカミキリは、国内では平成24年に愛知県で初めて確認され、大阪府内でも平成27年にさくらで初確認されました。平成30年1月には環境省により特定外来生物に指定されています。

国内では、これまでに11都府県で被害が認められ、府内でもさくらだけでなく、うめやももなどの農作物での被害も増えており、さらに分布域を拡大しています。

クビアカツヤカミキリの被害に遭うと、樹木内が食い荒らされ、ひどい場合は枯死してしまいます。倒木等による危険や農作物、さくらなどの日本文化への被害が考えられます。

被害を抑えるためにはクビアカツヤカミキリの早期発見・防除が重要です。そこで本資料では、クビアカツヤカミキリの生態と被害を拡大させないための防除方法を示しました。

先に本書を平成31年春に発行してから2年が経過し、クビアカツヤカミキリへの登録農薬もようやく揃いつつあるので、最新の登録内容を取り入れて内容を増補改訂しました。

目　　次

1. はじめに	P. 1
2. クビアカツヤカミキリとは	P. 2
3. クビアカツヤカミキリの一生	P. 3
4. 被害の確認	P. 4
5. 全国・府内の発生状況	P. 5
6. 防除方法（1. 農薬に頼らない防除）	P. 6
防除方法（2. 農薬による防除）	P. 8
防除方法（3. 被害樹の伐採）	P. 12
7. 伐採樹の運搬・保管について	P. 13
8. もも害虫防除暦（例）	P. 14

クビアカツヤカミキリは特定外来生物です

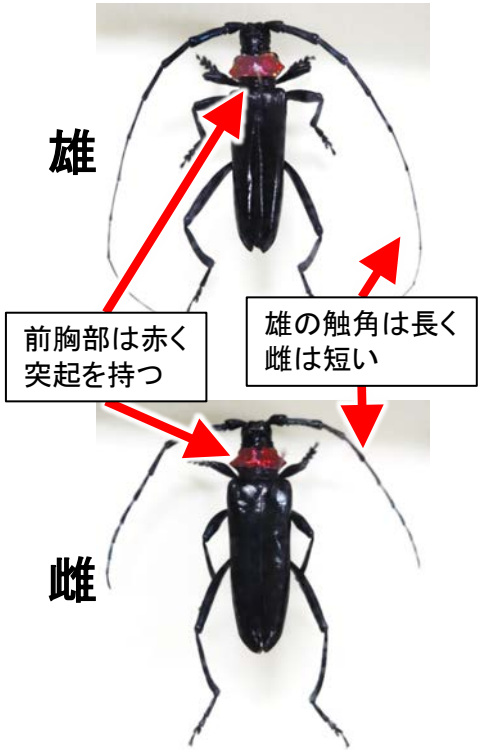
クビアカツヤカミキリは特定外来生物に指定されており、飼養等（飼育・栽培・保管・運搬・販売・譲渡・輸入・野外への放出等）が原則として禁止されています。
違反した場合は、最高で個人の場合3年以下の懲役もしくは300万円以下の罰金、法人の場合は1億円以下の罰金が科せられます。

例えば、

- 採集した個体を飼育すること。
- 個体を移動させること、さらに他の地域に放つこと。

などは法律により禁止されています。

2．クビアカツヤカミキリとは



属性

種名	クビアカツヤカミキリ
学名	*Aromia bungii*
分類	コウチュウ目カミキリムシ科ジャコウカミキリ属 ※平成30年1月に特定外来生物に指定

形態（成虫）

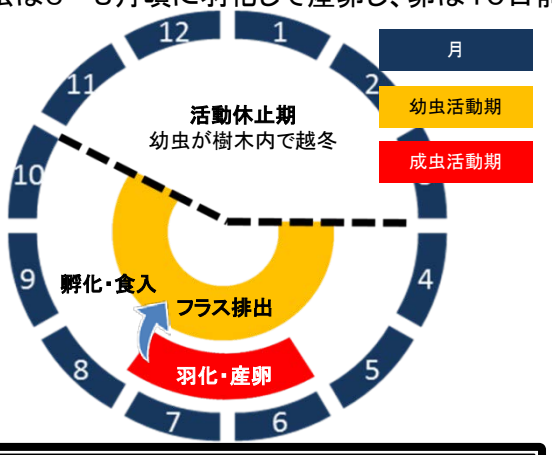
体長	25～40mm程度
特徴	体全体は黒く光沢がある。 前胸背板（頭部の下部）は赤く、側面にはこぶ状の突起を一対持つ。 雄の触角は体長より長く、雌の触角は体長より短い。 ジャコウのような独特の芳香を放つ液を分泌する。

生態

分布	中国、台湾、朝鮮半島、ベトナムなど
寄主	バラ科の樹木（生木） 日本ではさくら、もも、うめ、すももなどで確認されている。
生態	寄主樹木の樹皮表面や割れ目などに産卵し、孵化した幼虫が樹木内へ食入する。 食入した幼虫はフラス（糞と木くず、樹液などが混ざったもの）を排出しながら、樹木内を食害する。 成虫は2週間～1ヶ月くらい生きるが、越冬はしない。

生活環

幼虫は樹木内で4～10月頃まで活動し、フラスを排出する。多くが約2年後の春に樹体深部で蛹化する。
成虫は6～8月頃に羽化して産卵し、卵は10日前後で孵化する。孵化した幼虫は樹木内へ食入する。



1頭の雌が非常に多くの卵を産み、他のカミキリムシ類より繁殖能力が高い。
生涯平均で約350個、最大で約750個、産卵する能力があるといわれている。

4～10月

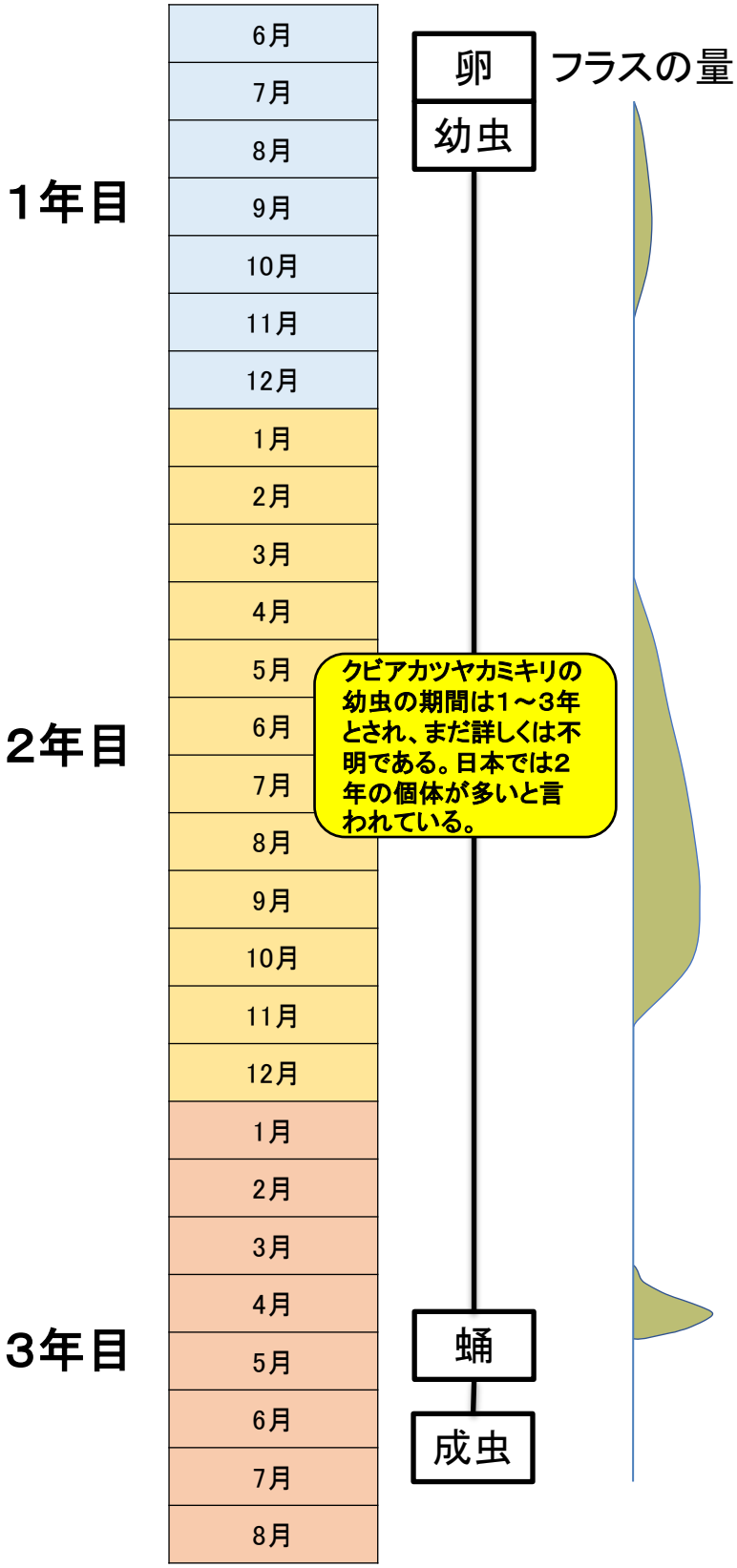
春になると幼虫が摂食活動を
再開し、フラスを排出。

6～8月

羽化のピークは6月中旬～7月中旬
羽化後すぐに交尾を開始し産卵。

（地独）大阪府立環境農林水産総合研究所Youtubeチャンネルにて「クビアカツヤカミキリについて知ろう～生態編～」公開中
http://www.kannousuiken-osaka.or.jp/portal_info/doc/201802050003 3/

3．クビアカツヤカミキリの一生



卵は樹皮の割目などに産まれる。白いゴマ粒状で１～２㎜

孵化した幼虫は樹皮に食入し、形成層にトンネルを掘って食害する。

若齢幼虫の出すフラスは少量で、そうめん程度の太さしかない。見落としやすいので注意。

幼虫は樹の組織を食べながらだんだん大きくなる。

大量のフラスを噴出させる。2年目のフラスはうどん状に。

次第に大きくなっていく幼虫。

幼虫に食害されて木の中はボロボロになっていく。

幼虫は木の中心部に蛹室を造り、そこで蛹になる。

初夏、蛹から羽化した新成虫は外へ飛び出す。

4．被害の確認

株元に大量に溜まったクビアカツヤカミキリのフラス

クビアカツヤカミキリの発生･被害の確認方法

○ 成虫（6～8月）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.2
○ 幼虫の排出するフラス（4～10月）・・・・・・・・・・・P.4
○ 脱出孔・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.4

成虫とフラスの確認が確実性が高く有効な調査方法である。

クビアカツヤカミキリのフラスの特徴

細いフラス（中華麺状）

若齢幼虫のフラス

太いフラス（うどん状）

老齢幼虫のフラス

クビアカツヤカミキリは、人の背丈くらいまでの高さの幹、太い枝、根に幼虫が食入することが多く、食入口からフラスを排出する。
若齢幼虫のフラスは細い中華麺状で見落としやすいので注意。
老齢幼虫のフラスは、うどん状に固まるのが特徴で大量に出てくる。

クビアカツヤカミキリのフラスと間違えやすいもの

スカシバ類のフラス（虫糞）

顆粒状で少量、蛹殻がある場合も

他のカミキリムシのフラス

繊維状など形状が違う

アリ類の蟻道

内部や周辺にアリが多くいる

その他のクビアカツヤカミキリ被害の特徴

成虫の脱出孔

縦に長い楕円形

被害枝の加害状況

形成層を中心に加害

食害された枝と表皮

多数の幼虫による
食入孔と食害痕

枯死したももの樹

株元には大量のフラス
多数の脱出孔あり

被害が進むと、果実が大きくならず収量が減少するだけでなく、やがて枯死してしまう。
枯れた樹木は倒木や落枝の危険性がある。

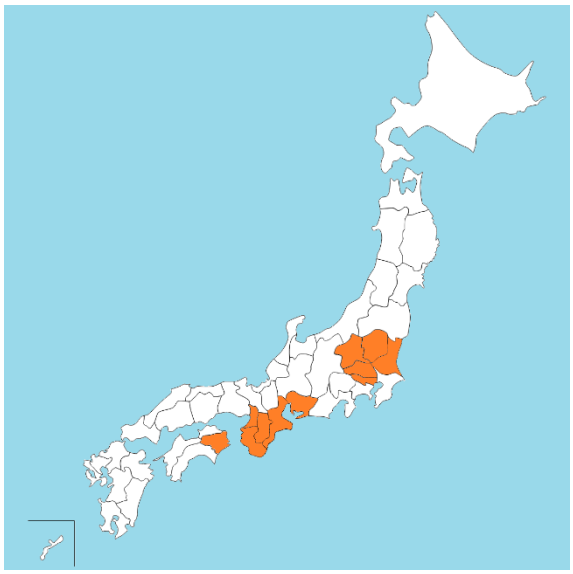
5．発生状況（令和２年１２月現在）

全国の発生状況

平成24年に愛知県で国内で初めて発見され、以降、各地で被害が発見されている。
現在、1都、1府、9県の計11都府県で発生が報告されている。

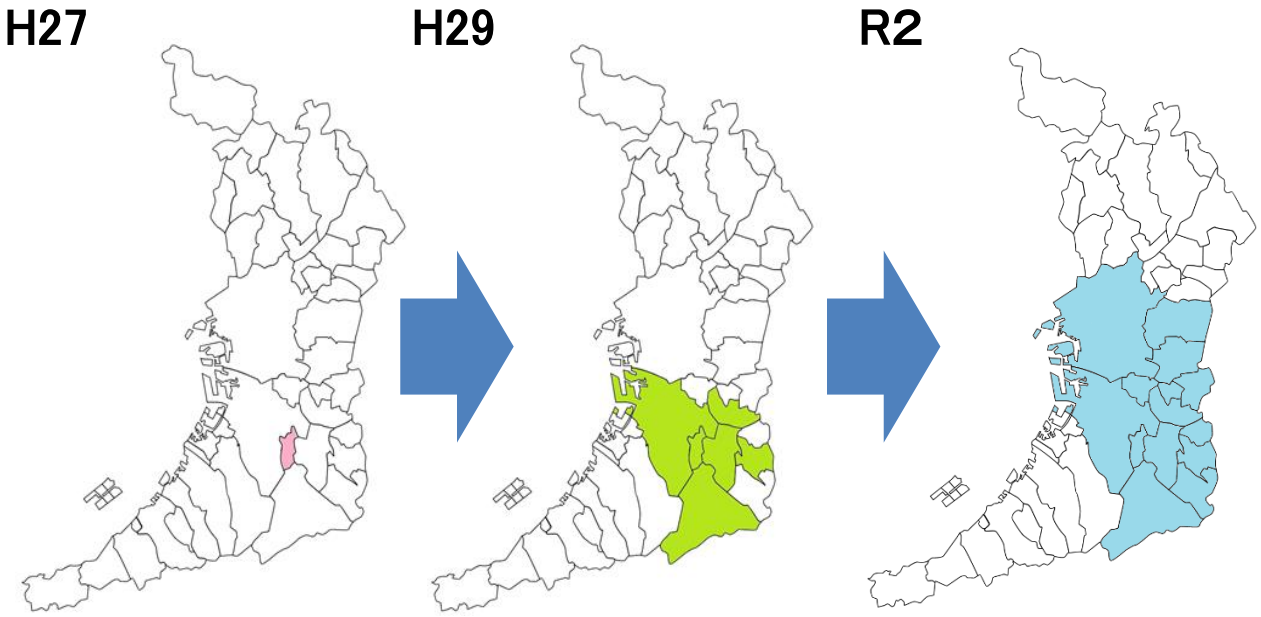
国内でのクビアカツヤカミキリの発生状況

都道府県	報告年	主な被害樹種
愛知県	平成24年	さくら
埼玉県	平成25年	さくら、もも、すもも、うめ
群馬県	平成27年	さくら、もも、すもも、うめ
東京都	平成27年	さくら、もも、すもも、うめ
大阪府	平成27年	さくら、もも、すもも、うめ
徳島県	平成27年	さくら、もも、すもも、うめ
栃木県	平成28年	さくら、もも、すもも、うめ
奈良県	令和元年	さくら、もも、すもも、うめ
三重県	令和元年	さくら
茨城県	令和元年	さくら
和歌山県	令和元年	もも、すもも、うめ



大阪府内での発生状況

府内では平成27年に大阪狭山市の公園のさくらで初めて確認された。その後、平成28年にうめ、平成29年にはももで被害が確認され、令和2年12月現在、14市町村にまで被害が拡大している。



まだ発見されていない地域でも、見つかっていないだけで生息している可能性がある。
自身のほ場や周辺のバラ科樹木をよく観察すること。

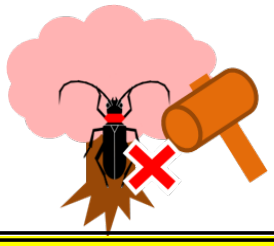
6．防除方法（1.農薬に頼らない防除）

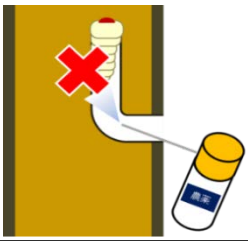
クビアカツヤカミキリの防除方法

1．農薬に頼らない防除
（1）成虫、幼虫の捕殺
（2）防風ネットを利用した成虫の分散防止

2．農薬による防除
（1）化学農薬による防除
（2）生物農薬による防除

3．被害樹の伐採
被害の大きい樹や枯死木の伐採・伐根
伐採樹の破砕・粉砕





枯死や被害が大きく
防除が困難な場合

一つの方法で完全な防除は難しいので、複数の方法を組合せてしっかりと防除する
早期発見・早期防除が重要

1．農薬に頼らない防除

（1）成虫、幼虫の捕殺

クビアカツヤカミキリは産卵数が1頭あたり数百個と非常に多く、繁殖能力が高い。また、飛翔したり、車などに捕まり長距離を移動することもあるため拡散しやすいので、見つけ次第その場で捕殺する。

成虫の捕殺（6～8月の成虫発生時期）

発生時期（羽化のピークは6月中旬～7月中旬）にほ場を見回り、見つけ次第、捕殺する。土の上で踏んでもなかなか潰れないので慎重に潰すこと。

ポイント クビアカツヤカミキリは昼行性のため、日中は活発に動き回る。羽化後すぐに交尾を開始するため、見つけたら必ずその場で捕殺する。

幼虫の捕殺（4～10月のフラス排出期）

① 硬めのブラシや千枚通しなどでフラスを掻き出す。
② 長い針金をフラス排出孔から坑道（幼虫が食い進んでできたトンネル）内に刺して内部の幼虫を刺殺する。

ポイント 幼虫は不規則に樹木内を食い進むので、坑道が曲がりくねって針金が届かないことも多い。樹皮をめくると樹が傷むので要注意。
食入初期のほうが比較的浅いところにいるため、刺殺できる可能性が高い。

食入初期のフラス（通常より細い）

樹木内に潜んでいた幼虫

幼虫の刺殺

6．防除方法（1.農薬に頼らない防除）

（2）防風ネットを利用した成虫の分散防止

フラスの出ている樹は成虫が発生する前の5月下旬までに樹幹にネットを巻き付け、羽化して樹から脱出した成虫を閉じ込め、他の樹への分散を防ぐ。また、未被害樹に0．4mm目合い等の目の細かいネットを被覆して飛来成虫による産卵を防止する効果を検証する取り組みも始まっている。

ネットは少なくとも成虫が活動する可能性のある8月中は被覆したままにすること

① ネットを必要な長さに切る（樹幹を2～3周、高さ1．5～2m程度まで巻けるように）。
② 幹が二股、三股に分かれている場合は、股の部分にネットをかける。
③ 樹幹部にネットを巻付け、針金やひもで固定する。ネットはゆったりと余裕を持って巻く。
接続部は逃げ出さないように針金等で縫い合わせたり、ステープラーで固定する。
上端はひもでしっかり固定し隙間ができないようにする。
下端はペグなどで地面との隙間がないようにしっかり固定する。

股の部分からネットを巻く

樹幹にネットを余裕をもたせ2重に巻く

ネットのつなぎ目はしっかりと縫い付ける

根元はペグで地面に固定する

ポイント

- ○ ネットを密着させて巻くとクビアカツヤカミキリが噛み切ることがあるので、樹幹との間にゆったり余裕をもたせて2重に巻く。
- ○ 根にも生息することがあるので、下部は地面と固定し、根までしっかりと覆う。
- ○ ネット内で交尾・産卵することがあるので、ネット設置後も成虫の発生時期はよく見回り、ネット内の成虫をハンマー等で殺す。

ネットを噛み切ろうとする成虫

成虫はネット内でも交尾・産卵する

高さ1．5～2mまで巻く

（地独）大阪府立環境農林水産総合研究所Youtubeチャンネルにて「クビアカツヤカミキリについて知ろう ～ネット巻編～」公開中
http://www.kannousuiken-osaka.or.jp/portal_info/doc/2018020500033/

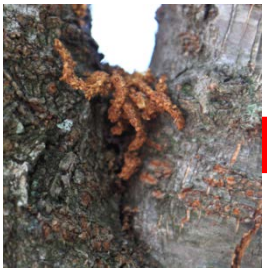
6．防除方法（2.農薬による防除）

2. 農薬による防除

（1）化学農薬による防除

エアゾール剤（ロビンフッド、園芸用キンチョールEなど）の使用方法

エアゾールタイプの農薬は、食入部にノズルを刺し、薬液を噴射して樹幹内にいる幼虫を殺虫する。
4～10月のフラス排出期に処理する。



フラスを硬いブラシや
千枚通しなどで取り除く

食入孔（フラス排出孔）
を探す

食入孔にノズルを刺し
薬液を噴射する

薬液が食入孔から
あふれるまで注入する

ポイント

○ 幼虫は不規則に樹木内を食い進むので、坑道が曲がりくねっていたり、坑道内にはフラスが充満していると薬液が届かないことがある。
○ 薬液が幼虫まで届かないと効果が期待できないため、比較的効果の安定する食入初期（細いフラスの時期）に防除するのがよい。

散布用水和剤、液剤、水溶剤等（アクタラ、テッパン、モスピラン、スプラサイド、ダントツなど）の使用方法

もも、うめ、すももなどの果樹類のクビアカツヤカミキリに対しても、樹体散布する農薬の登録が増えてきた。主に成虫発生期に樹体に噴霧器等で散布し、成虫やふ化直後～初期の幼虫を殺虫する。

ポイント

○ 散布に当たっては、葉や枝先ばかりでなく、クビアカツヤカミキリ成虫が活動する主枝や樹幹部にも薬剤が十分にいきわたるよう注意して散布する。
○ 散布時期は果実の収穫時期と被るため、収穫前日数など登録内容を十分確認して散布する。

（2）生物農薬による防除

「バイオリサ・カミキリ」の使用方法

カミキリ類に寄生する系統の昆虫病原性糸状菌（ボーベリア　ブロンニアティ）が付着した不織布製剤を樹幹の分枝部分などに架けて使用する。成虫が触れることで感染し、2～3週間で死亡させる。

かんきつに使用したバイオリサ・カミキリと
接触するゴマダラカミキリ

感染・致死したキボシカミキリ

ポイント

感染後、致死するまで2週間以上かかり、その間も交尾・産卵するので成虫を見つけ次第捕殺する。
成虫の発生初期の6月上～中旬頃に設置する。生きた菌を使用しているため、購入後は乾燥した冷暗所（約5℃）に保管し、入手後はなるべく早く使い切ること。

6．防除方法（2.農薬による防除）

クビアカツヤカミキリに登録のある主な農薬

農薬は使用する作物（樹木類も含む）と対象害虫に登録のあるものしか使用してはならない。
農薬使用時にはラベル（登録情報）を確認し、記載内容を守って使用すること。

（令和3年1月現在）

作物名	農薬名（成分名）	IRACコード	適用害虫	希釈倍数	使用方法	使用時期	使用回数
果樹類※	**ロビンフッド、ベニカカミキリムシエアゾール**（フェンプロパトリン）	3A	カミキリムシ類	－	樹幹・樹枝の食入孔にノズルを差し込み噴射	収穫前日まで	5回以内
果樹類	**バイオリサ・カミキリ**（ボーベリア　ブロンニアティ）	－(生)	カミキリムシ類	1本／樹	地際に近い主幹の分枝部分等に架ける	成虫発生初期	－
もも	**ロビンフッド、ベニカカミキリムシエアゾール**（フェンプロパトリン）	3A	カミキリムシ類	－	樹幹・樹枝の食入孔にノズルを差し込み噴射	収穫前日まで	5回以内
	アクタラ顆粒水溶剤（チアメトキサム）	4A	クビアカツヤカミキリ	2000倍	散布	収穫前日まで	3回以内
	モスピラン顆粒水溶剤（アセタミプリド）	4A	クビアカツヤカミキリ	2000倍	散布	収穫前日まで	3回以内
	スプラサイド水和剤（DMTP）	1B	クビアカツヤカミキリ	1500倍	散布	収穫21日前まで	2回以内
	スプラサイドM（DMTP）	1B	クビアカツヤカミキリ	200倍	樹幹部及び主枝に散布	収穫60日前まで	2回以内
	テッパン液剤（シクラニリプロール）	28	クビアカツヤカミキリ	2000倍	散布	収穫前日まで	2回以内
	ハチハチフロアブル（トルフェンピラド）	21A	クビアカツヤカミキリ	1000倍	散布	成虫発生期但し、収穫前日まで	2回以内
	ダントツ水溶剤（クロチアニジン）	4A	クビアカツヤカミキリ	2000倍	散布	収穫7日前まで	3回以内
	ベニカ水溶剤（クロチアニジン）	4A	クビアカツヤカミキリ	2000倍	散布	収穫7日前まで	3回以内
	オリオン水和剤40（アラニカルブ）	1A	クビアカツヤカミキリ	1000倍	散布	成虫発生期但し、収穫14日前まで	2回以内
	バイオセーフ（スタイナーネマ カーポカプサエ）	－(生)	クビアカツヤカミキリ	2500万頭（約10g）2．5Lに希釈	木屑排出孔を中心に薬液が滴るまで樹幹注入	幼虫発生期	－

※果樹類（かんきつ、りんご、なし、びわ、もも、うめ、おうとう、ぶどう、かき、マンゴー、いちょう（種子）、くり、ペカン、アーモンド、くるみ、食用つばき（種子）を除く）

農薬使用時は必ずマスク、メガネ、手袋、長袖の防除衣を着用し、朝などの涼しい時間帯におこなうこと

6．防除方法（2.農薬による防除）

作物名	農薬名 （成分名）	IRAC コード	適用害虫	希釈倍数	使用方法	使用時期	使用 回数
う め	**ロビンフッド、 ベニカカミキリムシエアゾール** （フェンプロパトリン）	3A	カミキリムシ類	―	樹幹・樹枝の食入孔にノズルを差し込み噴射	収穫前日まで	5回以内
	アクタラ顆粒水溶剤 （チアメトキサム）	4A	クビアカツヤカミキリ	2000倍	散布	収穫7日前まで	2回以内
	モスピラン顆粒水溶剤 （アセタミプリド）	4A	クビアカツヤカミキリ	2000倍	散布	収穫前日まで	3回以内
	スプラサイド水和剤 （DMTP）	1B	クビアカツヤカミキリ	1500倍	散布	収穫14日前まで	2回以内
	ダントツ水溶剤 （クロチアニジン）	4A	クビアカツヤカミキリ	2000倍	散布	収穫前日まで	3回以内
	ベニカ水溶剤 （クロチアニジン）	4A	クビアカツヤカミキリ	2000倍	散布	収穫前日まで	3回以内
	アクセルフロアブル （メタフルミゾン）	22B	クビアカツヤカミキリ	1000倍	散布	収穫前日まで	3回以内
	オリオン水和剤40 （アラニカルブ）	1A	クビアカツヤカミキリ	1000倍	散布	成虫発生期但し、収穫7日前まで	3回以内
	バイオセーフ （スタイナーネマ カーポカプサエ）	―(生)	クビアカツヤカミキリ	2500万頭 （約10g） 2．5Lに希釈	木屑排出孔を中心に薬液が滴るまで樹幹注入	幼虫発生期	―
す も も	**モスピラン顆粒水溶剤** （アセタミプリド）	4A	クビアカツヤカミキリ	2000倍	散布	収穫前日まで	3回以内
	スプラサイド水和剤 （DMTP）	1B	クビアカツヤカミキリ	1500倍	散布	収穫14日前まで	2回以内
	テッパン液剤 （シクラニリプロール）	28	クビアカツヤカミキリ	2000倍	散布	収穫前日まで	2回以内
おうとう	**アクタラ顆粒水溶剤** （チアメトキサム）	4A	クビアカツヤカミキリ	2000倍	散布	収穫前日まで	2回以内
	モスピラン顆粒水溶剤 （アセタミプリド）	4A	クビアカツヤカミキリ	2000倍	散布	収穫前日まで	1回以内
ネクタリン	**アクタラ顆粒水溶剤** （チアメトキサム）	4A	クビアカツヤカミキリ	2000倍	散布	収穫前日まで	3回以内
	ハチハチフロアブル （トルフェンピラド）	21A	クビアカツヤカミキリ	1000倍	散布	成虫発生期但し、収穫前日まで	2回以内
	オリオン水和剤40 （アラニカルブ）	1A	クビアカツヤカミキリ	1000倍	散布	成虫発生期但し、収穫21日前まで	2回以内
小粒核果類(うめ、すももを除く)	**モスピラン顆粒水溶剤** （アセタミプリド）	4A	クビアカツヤカミキリ	2000倍	散布	収穫前日まで	3回以内
小粒核果類(うめを除く)	**アクタラ顆粒水溶剤** （チアメトキサム）	4A	クビアカツヤカミキリ	2000倍	散布	収穫7日前まで	2回以内
	オリオン水和剤40 （アラニカルブ）	1A	クビアカツヤカミキリ	1000倍	散布	成虫発生期但し、収穫7日前まで	3回以内

6．防除方法（2.農薬による防除）

作物名	農薬名（成分名）	IRACコード	適用害虫	希釈倍数	使用方法	使用時期	使用回数
さくら	ロビンフッド、ベニカカミキリムシエアゾール（フェンプロパトリン）	3A	クビアカツヤカミキリ	―	樹幹・樹枝の食入孔にノズルを差し込み噴射	―	6回以内
	園芸用キンチョールE（ペルメトリン）	3A	クビアカツヤカミキリ	―	【専用ノズルつけかえ方式】容器のボタンを引き抜き、専用ノズルにつけかえ、食入部にノズルを差し込み、薬剤が食入部から流出するまで噴射する。【2ウェイノズル方式】折り畳まれた専用ノズルを引き上げ、食入部にノズルを差し込み、薬剤が食入部から流出するまで噴射する。	―	―
	アクセルフロアブル（メタフルミゾン）	22B	クビアカツヤカミキリ	100倍	木屑排出孔を中心に薬液が滴るまで樹幹注入	―	6回以内
				1000倍	散布	成虫発生直前～成虫発生期	
				200倍	主幹から株元に散布	成虫発生直前～成虫発生期	
	マツグリーン液剤2（アセタミプリド）	4A	クビアカツヤカミキリ	50倍	食入孔に注入	発生初期	5回以内
				200倍	散布	発生初期	
	ウッドスター（ジノテフラン）	4A	クビアカツヤカミキリ	注入部直径 6cm～10cm：8～12mL、10cm～20cm：12～24mL、20cm～30cm：24～36mL、30cm～40cm：36～48mL、40cm～50cm：48～60mL、50cm～60cm：60～72mL、以降、直径が10cm増す毎に12mLを追加する。	樹幹注入	新葉展開後～落葉前まで	3回以内
	リバイブ（エマメクチン安息香酸塩）	6	クビアカツヤカミキリ	胸高直径(樹幹部)6～10cm：30mL、11～15cm：60mL、16～20cm：90mL、21～25cm：120mL、26～30cm：150mL、30cm以上は胸高直径が5cm増すごとに30mLを増量する。	樹幹部に注入孔をあけ、注入器の先端を押し込み樹幹注入する。	発生前～発生期	1回以内
	アトラック液剤（チアメトキサム）	4A	クビアカツヤカミキリ	胸高直径(樹幹部)6～10cm：30mL、11～15cm 60mL、16～20cm ：90mL、21～25cm： 120mL、26～30cm：180mL、30cm以上は胸高直径が5cm増すごとに30～60mLを増量する	樹幹注入	幼虫発生前～幼虫発生期	3回以内
	モスピラン顆粒水溶剤（アセタミプリド）	4A	クビアカツヤカミキリ	2000倍	散布	発生初期	5回以内
	ダントツ水溶剤（クロチアニジン）	4A	クビアカツヤカミキリ	2000倍	散布	成虫発生初期	5回以内
	ベニカ水溶剤（クロチアニジン）	4A	クビアカツヤカミキリ	2000倍	散布	成虫発生初期	5回以内
	トルネードエースDF（インドキサカルブ）	22A	クビアカツヤカミキリ	1000倍	散布	成虫発生初期	4回以内
	ダブルトリガー液剤（シクラニリプロール）	28	クビアカツヤカミキリ	2000倍	散布	発生初期	2回以内
	オリオン水和剤40（アラニカルブ）	1A	クビアカツヤカミキリ	1000倍	散布	成虫発生期	5回以内
	バイオセーフ（スタイナーネマ カーポカプサエ）	―(生)	クビアカツヤカミキリ	2500万頭(約10g) 2．5Lに希釈	木屑排出孔を中心に薬液が滴るまで樹幹注入	幼虫発生期	－
	バイオリサ・カミキリ（ボーベリア ブロンニアティ）	―(生)	クビアカツヤカミキリ	1本／樹	主幹又は主幹の分枝部分に巻き付ける	成虫発生初期	―
食用さくら(葉)	バイオリサ・カミキリ（ボーベリア ブロンニアティ）	―(生)	クビアカツヤカミキリ	1本／樹	主幹又は主幹の分枝部分に巻き付ける	成虫発生初期	－
	バイオセーフ（スタイナーネマ カーポカプサエ）	―(生)	クビアカツヤカミキリ	2500万頭(約10g) 2．5Lに希釈	木屑排出孔を中心に薬液が滴るまで樹幹注入	幼虫発生期	－

伐倒木、枯損木のくん蒸処理

もも,うめ,すもも,さくら(伐倒木),(枯損木)	キルパー40（カーバムナトリウム塩）	8F	クビアカツヤカミキリ	被覆内容積1立方m当り原液750～1500mL	加害された伐倒木を集積したものまたは枯損木に、所定薬量を散布し、直ちにビニールシート等で密閉し所定期間くん蒸する。	－	1回以内
もも,さくら(伐倒木)	NCS（カーバム）	8F	クビアカツヤカミキリ幼虫	被覆内容積1立方m当り原液1．0L	加害された伐倒木を配置し本剤を散布し、直ちにビニール等で密閉し、くん蒸する。	－	1回以内

6．防除方法（3.被害樹の伐採）

3. 被害樹の伐採

クビアカツヤカミキリの被害にあった樹は、被害がひどい場合は枯死する可能性がある。
果樹の場合は、果実へ養分が供給されず、収穫期が近づいても実が太らないことがある。
枯死木や生産性がなくなった樹木は、クビアカツヤカミキリ発生源となるだけでなく倒木や落枝の危険もあるため伐採する。

伐採の注意点

伐採処分　伐採は成虫の分散を防ぐため、緊急の場合を除き、**9月～翌年4月末**の間に行う。

切断した幹や枝からも羽化する可能性があるため、伐採後はすみやかに破砕や焼却処分を行う。

破砕・粉砕

現地でチッパーにより破砕、又は近隣のチップ工場にて破砕（チップの厚さは10mm以下を目安）。

焼却処分

市町村焼却施設（もしくは市町村の清掃工場）で焼却可能な場合は、分散防止措置を実施の上、現地より運搬して焼却する。
現地での野焼きは原則禁止（廃棄物の処理と清掃に関する法律）。

ネット・ビニルシート被覆

直ちに破砕や焼却処分が実施できない場合は、ネットやビニルシートなどで伐採樹を覆い羽化・分散を防ぐ。

野焼きについて

廃棄物の処理と清掃に関する法律第16条の2により、野焼きは原則として禁止されている。
一方で施行令第14条第4項において、「農業を営むためにやむを得ないものとして行われる廃棄物の焼却」については例外とされている。
例外に該当するかどうかは市町村によって異なるため必ず確認し、なるべく焼却施設にて焼却する。

処分に伴う運搬について

特定外来生物に指定されており、伐採樹であっても、内部に幼虫が潜んでいる場合は運搬が制限される。
このため、処分のための運搬であっても市町村の指示に従うこと。詳しくは次ページを参照。

伐採後の切株

クビアカツヤカミキリの幼虫は、根部も加害する。伐採後の羽化・分散を防ぐため伐根処理が必要となる。
伐根が困難な場合は、ビニルシートや肥料袋などで多い、さらにネットで被覆することで内部の幼虫の羽化後の分散を防ぐ

7．伐採樹の運搬・保管について

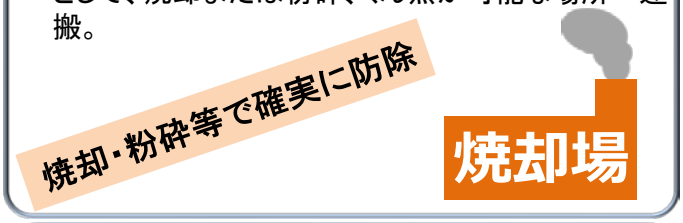
特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律の規制に係る運用（概要）

○「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」（外来生物法）において、特定外来生物の飼養等（飼養、栽培、保管、運搬）は原則禁止されている。
○クビアカツヤカミキリは、駆除のため伐採処分が必要な場合があるが、伐倒した被害木に入り込んだ個体については、その場での殺処分が困難であり、許可無く運搬できないことは、迅速な防除の妨げとなる。
○そのことから、クビアカツヤカミキリの運搬および保管に係る運用を環境省において整理しており、下記にその内容を要約する。

1．次の要件を全て満たす場合、外来生物法の「運搬」には該当しない。

○伐採防除は成虫脱出期以外（概ね9月～翌年4月）に確実な逸出防止措置をとった上で実施する。
○やむを得ず、成虫脱出期及びその前後（5月～8月）に緊急的に実施する場合は、厳重に梱包または閉鎖空間型の車両（バン等）に積載するなどし、運搬中の確実な逸出防止措置をとるとともに、速やかに殺処分する。
○焼却処理や廃棄物の処分等については、市町村の指示に従うこと。

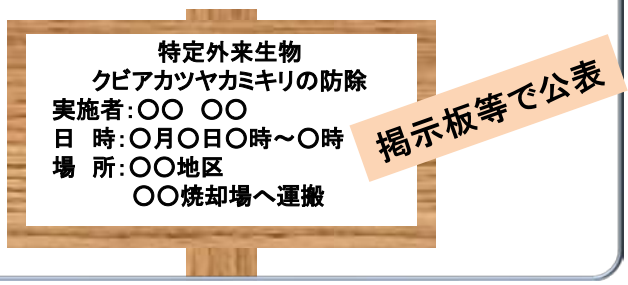
ア）その場で全ての個体を殺処分することが困難である場合、拡散を防ぎ、確実に殺処分することを目的として、焼却または粉砕、くん蒸が可能な場所へ運搬。



イ）目視で確認できる個体については、運搬する前に確実に殺処分を行うこと。

ウ）運搬中に当該虫や樹木が落下・飛散しないよう、逸出防止措置を実施する。

エ）特定外来生物の防除であることを周知するため、実施する主体・実施日程・場所を事前に公表する。



※　エ）における「実施する主体」は防除の実施者、公表の方法としては、「掲示板による周知」のほか「HPでの公表」、「広報物・チラシの配布」、「回覧板での周知」などが考えられる。

2．上記1に付随してやむを得ず一時的に当該生物・樹木を保管する場合

○逸出防止措置が十分にとられており、第三者が容易に持ち出せないよう管理され、かつ必要最小限の期間に限れば、外来生物法の「保管」には該当しない。

◎本運用は、継続的かつ計画的な防除の際に、主務大臣の防除の確認・認定を受けることを妨げない。
詳細は近畿地方環境事務所野生生物課（06-4792-0706）まで

8．もも害虫防除暦（例）

果樹はクビアカツヤカミキリ以外にも様々な害虫に加害されるため、他の害虫の発生状況を見ながら総合的に防除することが効率的である。

時期		生育ステージ	クビアカツヤカミキリ生活環		農薬防除				
月	旬				対象害虫	薬剤（IRACｺｰﾄﾞ）			
						散布剤	食入孔注入剤	生物農薬	
12	上		活動休止期		カイガラムシ類	マシン油			
	中								
	下								
1	上								
	中								
	下								
2	上								
	中								
	下								
3	上				コスカシバ	フェニックスフロアブル（28）（発芽前）			
	中								
	下								
4	上	開花	フラス排出期						バイオセーフ（ー(生)）
	中				シンクイムシ類、モモハモグリガ、アブラムシ類	スカウトフロアブル（3A）	ロビンフッド、ベニカカミキリムシエアゾール（3A）		
	下								
5	上								
	中				カイガラムシ類幼虫	アプロード水和剤（16）			
	下	袋掛け			シンクイムシ類、モモハモグリガ、アブラムシ類	ロディー乳剤（3A）			
6	上			成虫発生期	クビアカツヤカミキリ、カイガラムシ類	スプラサイド水和剤（1B）		バイオリサ・カミキリ（ー(生)）	
	中				クビアカツヤカミキリ、シンクイムシ類、モモハモグリガ、アブラムシ類	モスピラン顆粒水溶剤（4A）			
	下	収穫							
7	上				シンクイムシ類、モモハモグリガ、カメムシ類	アディオン乳剤（3A）			
	中				ハダニ類	スターマイトフロアブル（25A）			
	下				クビアカツヤカミキリ、シンクイムシ類、モモハモグリガ、アブラムシ類、カメムシ類	ダントツ水溶剤（4A）			
8	上				クビアカツヤカミキリ、シンクイムシ類、モモハモグリガ、アブラムシ類	モスピラン顆粒水溶剤（4A）			
	中								
	下				コスカシバ	トラサイドA乳剤（1B）			
9	上								
	中								
	下								
10	上								
	中								
	下								

※赤字はクビアカツヤカミキリに登録のある農薬

この防除暦は一例であり、地域やほ場によって害虫の種類や発生消長に違いがあるため、ほ場をよく観察して適切に防除すること。農薬使用時にはラベルをよく読み、登録内容や使用上の注意事項を確認してから使用すること。特に収穫直前の防除は収穫前日数に注意し、計画的に防除すること。

クビアカツヤカミキリやそのフラスを発見した場合は、できるだけその場で捕殺し、発見した場所の市町村の指示に従ってください。また、防除法については下記までお問い合わせください。

名 称 及 び 所 在 地
（農地のもも、うめ、すもも等果樹類のクビアカツヤカミキリに関すること）
大阪府環境農林水産部農政室推進課病害虫防除グループ 〒583-0862　羽曳野市尺度442 直通　072-957-0520　FAX　072-956-8711
大阪府環境農林水産部農政室推進課地産地消推進グループ 〒559-8555　大阪市住之江区南港北1-14-16　咲洲庁舎22階 代表　06-6941-0351（内線6744）　FAX　06-6614-0913
大阪府北部農と緑の総合事務所　農の普及課 〒567-0034　茨木市中穂積1-3-43 三島府民Cビル内 代表　072-627-1121　FAX　072-623-4321
大阪府中部農と緑の総合事務所　農の普及課 〒581-0005　八尾市荘内町2-1-36 中河内府民Cビル内 代表　072-994-1515　FAX　072-991-8281（農の普及課）
大阪府南河内農と緑の総合事務所　農の普及課 〒584-0031　富田林市寿町2-6-1 南河内府民Cビル内 代表　0721-25-1131　FAX　0721-25-0425
大阪府泉州農と緑の総合事務所　農の普及課 〒596-0076　岸和田市野田町3-13-2 泉南府民Cビル内 代表　072-439-3601　FAX　072-438-2069
（公園のさくら等のクビアカツヤカミキリに関すること、特定外来生物に関すること）
大阪府環境農林水産部みどり推進室みどり企画課 〒559-8555　大阪市住之江区南港北1-14-16　咲洲庁舎22階 代表　06-6941-0351（内線2745）　FAX　06-6210-9551

本資料に関する疑問点、不明な点等のお問合せは下記までお願いします。

大阪府
環境農林水産部農政室推進課病害虫防除グループ
〒583－0862　羽曳野市尺度442
TEL　072－957－0520　FAX　072－956－8711
Email　byogaichu@sbox.pref.osaka.lg.jp

編集協力：（地独）大阪府立環境農林水産総合研究所

令和3年3月作成